



男性の初婚年齢が25年前とほとんど変わらぬ事情

* 本稿は週刊エコノミスト(第83巻 第27号 通巻3756号)に寄稿したものです。

2005年12月29日(木)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: vermeer@pa3.so-net.ne.jp

厚生労働省が毎年発表している「人口動態統計」によると、2004年の平均初婚年齢は夫が29.6歳、妻が27.8歳である(図表)。1970年以降、男女とも長期的に上昇傾向で推移しており、とりわけ女性の平均初婚年齢の上がり方が急だ。80年時点(夫27.8歳、妻25.2歳)と比べると、男性は1.8年、女性は2.6年、それぞれ初婚年齢が遅くなっている。

ただ、私たちの身の回りで「非婚化」や「晩婚化」が顕著に進んでいる実態を踏まえると、四半世紀前と比べ平均初婚年齢が1~2歳程度しか上昇していないというのは実感にそぐわない。30~40代あるいは50代でも独身男女はかなりの数に上っているとみられ、感覚的には、現在の平均初婚年齢の水準は男女とももっと高いのではないかとみている。

実は、この統計数値と実感の乖離は、平均初婚年齢の計算方法によるところが大きい。平均初婚年齢は、各地の役所に提出された婚姻届をもとに夫婦が同居を開始した日付にさかのぼって、その時点における夫の平均年齢あるいは妻の平均年齢を算出したものだ(再婚者は含まない)。

ここで注意すべきことは、平均初婚年齢はその年に結婚した夫婦を母集団として平均年齢を算出している点だ。まだ結婚していない男女は、そもそも母集団のなかに含まれていない。一生独身で人生を終える人は、常に平均初婚年齢を押し上げる潜在的要因になっているにもかかわらず、結婚をしないために実際の平均初婚年齢の計算過程には反映されない。

では、一生誰とも結婚することなく人生を終える人はどの程度の数になるのか。人口統計では、50歳時点で未婚の人はその後も結婚することがないと仮定して、50歳時点での未婚率(全体数に占める未婚者の割合)を生涯未婚率と定義している。総務省の「国勢調査」に基づいて計算すると、2000年の生涯未婚率は男性が12.3%、女性が5.6%となっている。男性の場合、8人に1人は一生独身という計算だ。これを人数に換算すると、男性が約64.5.1万人、女性が約310.4万人、合計で955.5万人に達する。

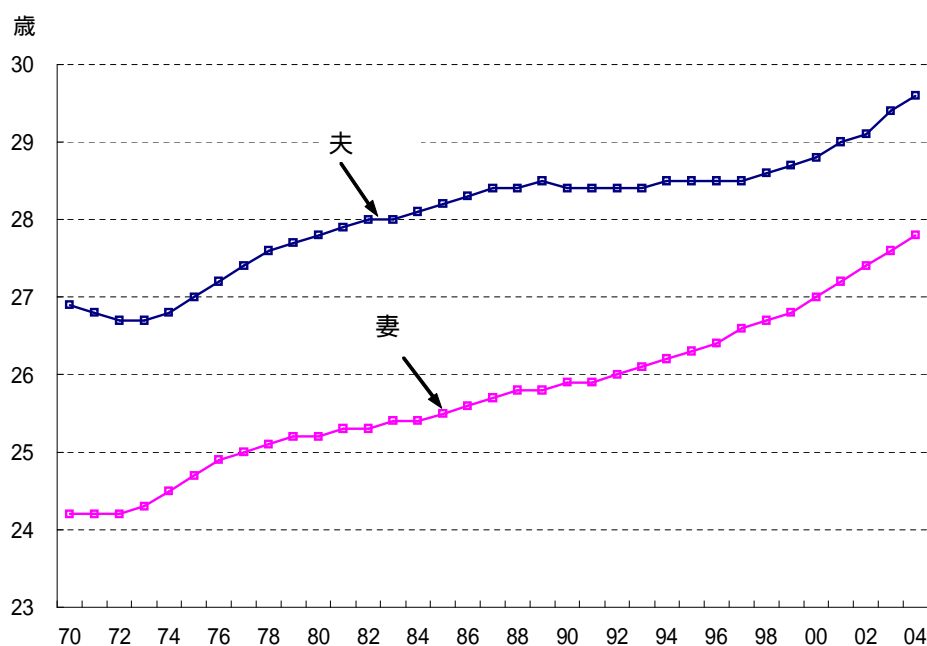
80年時点の生涯未婚率は男性が2.6%、女性が4.5%であったので、男性の生涯未婚率は20年間で5倍近く跳ね上がったことになる。

冒頭で述べたとおり、男性の平均初婚年齢は女性と比べて緩やかな上昇だが、実はその裏で一生「結婚しない」あるいは「結婚できない」男性が急増している。「晩婚化」の問題は女性で深刻化しているが、「非婚化」の問題は女性よりもむしろ男性のほうが深刻といえるだろう。

このように、身の回りで結婚時期の遅い人が急増している場合、それが平均初婚年齢に反映されるのはずっと先の話で（一生独身の場合は平均初婚年齢に全く反映されない）、公式統計に表れる平均初婚年齢と、私たちが肌で感じる平均初婚年齢に大きな乖離が生じることになるのだ。

平均値をみる場合、その母集団に何が含まれていて、何が含まれていないかをよく考える必要があるだろう。

図表 男性と女性の平均初婚年齢の推移



(出所) 厚生労働省「人口動態統計」より作成

【人口動態統計】

出生・死亡・死産・婚姻・離婚といった人口動態に関する五つの事象についてまとめた統計。各種の届け出を受けた各市町村長が調査票を作成する。そのうち平均初婚年齢は、「戸籍法」によって各市町村役場に提出された婚姻届に基づいて集計される。